

マタイ受難曲 - 概略説明

作曲者について

- ・ **作曲者** ヨハン・セバスティアン・(Johann Sebastian, 略してJ.S.) バッハ
バッハのみでも通じるが、親族にも作曲家が多いので、厳密には上のように記す。
- ・ **存命** 1685 - 1750 (浜松バッハ研は1985 -)
- ・ **任地** 生まれはアイゼナッハ、以後アルンシュタット、ミュールハウゼン、ワイマール、ケーテン、ライプツィヒ (1723 - 1750年) にて活動。

マタイ受難曲について

- ・ **初演** 1727年 (過去には1729年説も) の受難節に教会内で演奏された。
 - ・ **受難節** 春分後の満月後の最初の日曜日が復活節で、その2日前の金曜日。
 - ・ **あら筋** イエスがエルサレムにて捕らえられ十字架にかけられて亡くなるまでの、いわゆる受難のくだり。
 - ・ **作曲者が付けたタイトル** 楽譜の第1曲目の最初のページの上に記されている。
Passio D.N.J.C.(Domini Nostri Jesu Christi) secundum Matthaum
/マタイが伝える我らの主、イエス・キリスト(救い主)の受難
 - ・ **歌詞から見た曲の構成**
 - ・ **マタイによる福音書 第26-27章** 合唱絡みの曲 - 4, 9, 36, 38, 41, 45, 50, 53, 58, 61, 63, 66
グレゴリオ聖歌以来の伝統により、ト書きの部分をテノール独唱、イエス他の個人の台詞を独唱、弟子達や群衆など複数人の台詞を合唱が分担する。
 - ・ **コラール** 合唱絡みの曲 - (1,) 3, 10, 15, 17, 19, 25, 29, 32, 37, 40, 44, 46, 54, 62
教会で会衆が歌う賛美歌のうち、特にドイツ・プロテスタント教会で歌われるものをさす場合が多く、宗教改革の祖ルターを始め、ラテン語聖歌のドイツ語化や、世俗曲の旋律に新たに作詞したものが多い。「マタイ受難曲」では物語の場面毎に、弟子たちや信徒たちの心情を代弁する役割を持っている。
 - ・ **自由詩による曲** 合唱絡みの曲 - 1, 20, 27, 30, 60, 67, 68
作詞はJ.S.バッハとの共作が多いC.F.ヘンリーツィによる。「マタイ受難曲」での役割りは、コラールよりも更に客観的な注釈を加えるものが多い。
 - ・ **必要な編成** 木管と弦による管弦楽団と4部合唱が各2セット必要。各々Chorus - I/IIと称し、ステージ左側がChorus - I、右側がChorus - II、それぞれの中はステージ中央寄りに低音域楽器や低声部、外側ほど高音域楽器や高声部となるよう、左右対称に並ぶ。
 - ・ **合唱団内での分担** アマチュアではよほど人数が多くない限りは、Chorus - IのみまたはIIのみの曲、またはそれぞれのみが長い部分は全員で歌う(詳細は練習時に指示あり)。
 - ・ **演奏時間** 第1部 - 約1時間20分、第2部 - 約1時間40分、計 - 約3時間。
- * **合唱団員の準備** 歌詞の意味を理解して歌えるように、最低限合唱が絡む曲の和訳は譜面上の歌う時に目に入る場所に書き込んでおくことが望ましい。